

新刊紹介

Le Maṅḍala du Mañjuśrīmūlakalpa par Ariane Macdonald
(Collection Jean Przyluski publiée sous la direction de
Marcelle Lalou et Constantin Regamey, Tome III) 16×25
cm, 190 p. Adrien-Maisonneuve, Paris-1962

近年フランスにあっては、ローヌ・女史
(M. Lalou)を中心とするチベット文書
の研究が、そのほかにその確実な成果をお
よびつづけているのである。このたびは
たまたまその一にめぐりつゝ、

本書は「聖文殊師利の根本儀軌」(Ar-
yaMañjuśrīmūlakalpa 天息災訳大方広
菩薩藏文殊師利根本儀軌經二十卷 大正
No. 1191)のチベット訳影印版 Vol. 6, No.
162)に關する研究である。この經典が
mahāvācavaiśvānara として *mahā-*
*yāna*stra として *tantra* としてあつた位置
するものが、重要な典籍であることは、
すでにフレイシホサ教授 (J. Fillozat) が
論じている (L'Inde Classique 2015)。
この梵本の出版がこれであり (T. Ga-
rapati Śāstrī—Āryamañjuśrīmūlakalpa,

Trivandrum Sanskrit Series, part I, n°
LXX 1920; part II, n° LXXXVI 1922;
part III, n° LXXXIV 1925) としてこ
ゝでの研究 (M. Lalou—Iconographie
des Étoffes Peintes (pata) dans le
Mañjuśrīmūlakalpa, Paris 1930, IV-VII
の訳註) M. Lalou—Un traité de Magie
bouddhique, Études d'orientalisme pu-
bliées par le Musée Guimet à la mé-
moire de R. Linossier, Paris 1932, t.
II, pp. 303-322; K. P. Jayaswal—An
Imperial History of India in a Sanskrit
text, Lahore 1934, LIII-LI) のチベット訳
との校合出版 (M. Lalou—Mañjuśrīmū-
lakalpa et Taramūlakalpa, HJAS, Vol.
I nov. 1936, pp 327-349, XLI-XXXIX
の訳註) が公刊されたことが、本書を以

これらの研究と一連をなすものである。

まず初めに序論として九〇頁におよぶ
解説論文をかかけ、附録として「*Jan-dh-*
*ya*ns Mkhymbre'i dban-po」を中心と
するラマの系譜に關する記述を挿入し、
つきにガナパティ本に依つての、この經
典の第二品と第三品のフランス訳をお
よびつづけている。第二品の「マンダ
ラを造りかたを説いたものである。も
ちろんそのフランス訳は、いわゆるラン
ス学派の例にもれず、厳密な原典学的研
究方法を用い、脚註にはあらゆる關連事
項や関連文献の所在が提示されている。
しかるにこれら両品のチベット訳テキスト
をかかげつづけるが、これにはナルタン、
北京、ラサの三版が対校されている。そ
して巻末に主要引用書目と索引とを附し
てゐる。

本書はほぼ以上のことを体裁と内容と
を有しているが、漢訳との照合はなされ
ていず、またチベット訳の校合にデルゲ

版を加えていない。

ちなみに、この經典に関しては、堀内寛仁氏の研究〔文殊儀軌經の梗概——主として經の説相について——〕『密教文

化』第七・八・九・十号〔昭和二四年〕があることを附言しておこう。

(佐々木教)

仏教文学研究(第一集)

仏教文学研究会編

DIE RELIGION DES BUDDHISMUS

BAND 1. DER HEILSWEG DES MÖNCHTUMS

von DR. DIETER SCHLINGLOFF

an den Verlag WALTER DE GRUYTER & CO. BERLIN

1962

本書はGöttingen大学のD. Schlingloff博士によつて書かれた文庫本で二冊の内の上巻である。先ず序文においてパーリ語文献の考古学的確証を行い、テキストを分類している。第一章ではバラモン文化の概説から、仏陀以前の僧侶生活に関する様々な規定や習慣、特に教団の儀式や構造、或いはその目的などを具体的に述べている。第二章では輪廻や業の思想を説明して、苦しみから解脱する為の修行の段階やその方法を述べている。例えば呼吸によつて精神を集中させる方法とか、人間の精神や肉体を観じていく方法などを主として阿含經に依りながら明か

している。第三章は主として仏陀の伝記で、仏陀の青年時代から苦行・成道・説法の時代、更に入滅に至るまでの生涯を綜括的に述べ、最後に仏陀の人格について論述している。以上が本書の梗概であるが、全篇を通じて専門的なサンسكريットやパーリの用語を出来得る限り避けて、一般の人にも比較的読み易いように配慮している。そして雑多な仏教文学の中から中心となるべき宗教的モチーフを結晶させようとしており、古代の僧侶社会や仏伝を通じて仏陀の人格を明らかにしようとする努力していることは敬服に値するであらう。

(福島)

仏教と文学・芸能との交渉は深い。がその本格的究明はまだなされていない。

仏教文学研究会は、関連諸学科の研究者が協力して、その研究をなそうとするものである。本書はその会の研究成果の第一集で、「拈華微笑と笑拈梅花」(山岸徳平)「遊部考」(五来重)「天台教学から見た源氏物語」(大久保良順)「釈教歌者」(岡崎知子)「平家物語に於ける仏教説話について」(高橋貞一)「宴曲と神社」(外村久江)「文学・仏教・中世をめぐる諸問題」(榎克朗)「法語文芸」(菊地良一)「絵解と本願寺聖人親鸞伝絵」(福永静哉)「親鸞に関する中世の一談義本」(宮崎円遵)等、十篇の論文を収めている。仏教と文学・芸能との諸問題が諸種の角度から考究されていて興味深い。

B 6 版三〇八頁・昭和三八年
一月刊・価七〇〇円・法藏館

(山本)